

英  
國  
賦  
稅  
要  
覽

W371  
7

昭12  
A  
152

300365-001-1

W371-7

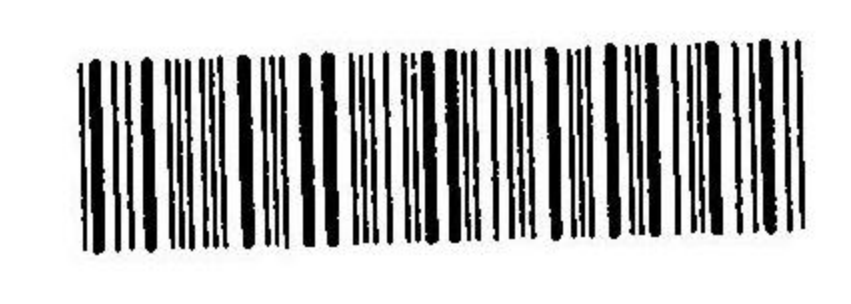
英国賦税要覽

アル・ドュドリー・バキストル／著

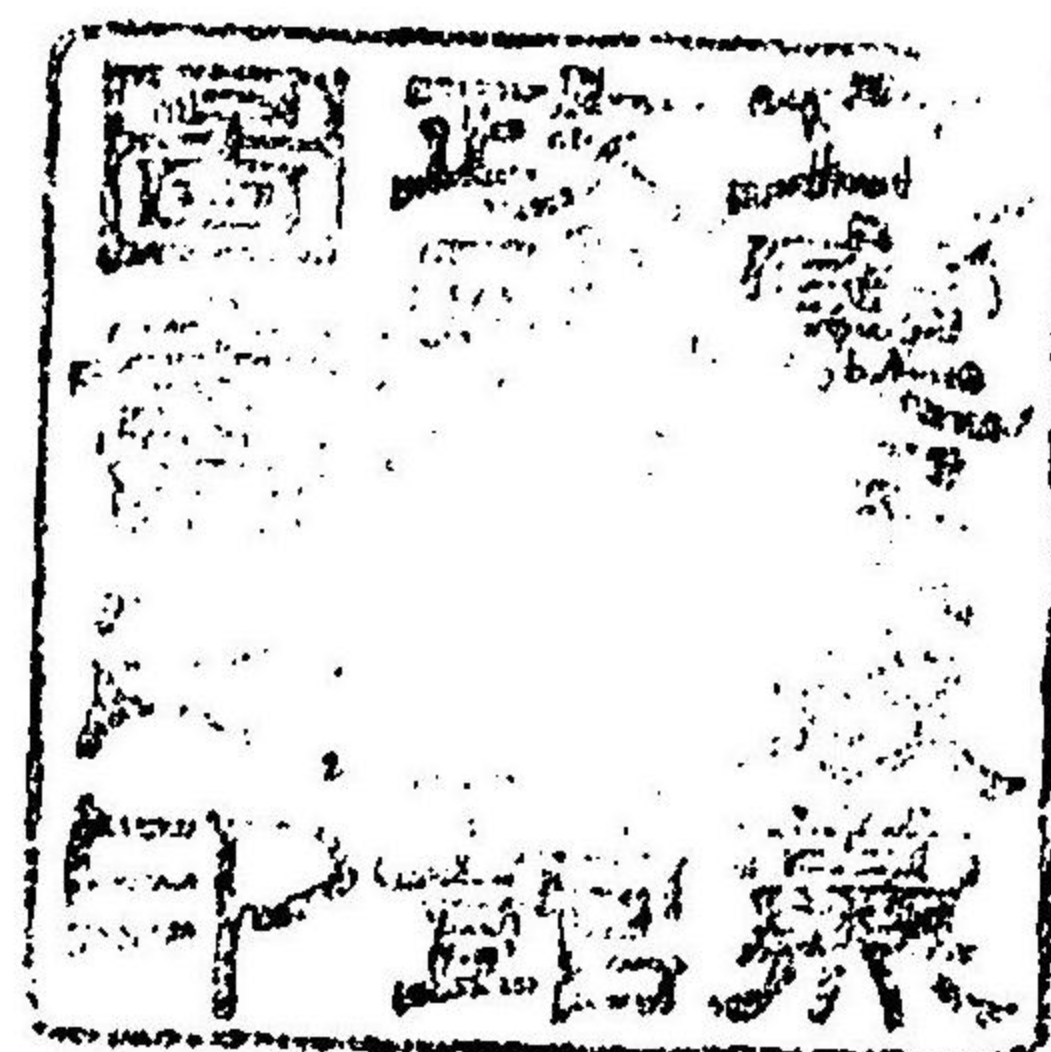
2冊

1871

BDE-0001



W371  
7



昭12  
A  
152

明治辛未初秋

瓊江何禮之譯

英國賦稅要覽

官許 勿皿科齋藏版

45.6.10



830483

緒言

一 原書ハ「デ、タキセーション、オフ、デ、ユナイテッド、キングダム」ト稱シテ英國賦稅書ノ義ナリ經濟ノ學士「アル、ド、ドリ、バキストル」ノ所著ニシテ千八百六十九年全國ノ會計ヲ摺載シタル者ナリ  
一 書中所載ノ度量ハ皆英國ノ通用ナリ今之ヲ盡ク我制度ニ改ムルキハ徒ニ煩ヲ増スノミ故ニ書中ニハ唯々原名ヲ存シテ爰ニ

武兌  
者

其ノ概畧ヲ舉ク

貨幣

六十枚ヲ以テ一兩ト為ス

一ペンニー

九分零七五

一シルリング

十二ペンニー

二朱ト三枚三九

一磅ニシリング

三兩ニ歩二朱三分

重量

一磅

百三十一枚六分

一クオルトル

三貫四百零四枚八

分

尺度

一方里

二十六町零二部二

十八步

容量

一ガルロン

二升零八勺四八七

五

一ブッセルハガルロン

一斗六升六合七勺

九

英國賦稅要覽

目次

卷之一

第一回

英國ノ財政ノ原ヲ論ス

第二回

收稅ノ本旨

第三回

收稅ノ法

第四回

租稅ノ大區別

卷之二

第五回

收入及資産ノ稅

第六回

用度ニ於ル税

第七回

職業及郵便ノ税

第八回

地方ノ「」ト及「」トル別名税

第九回

租税ノ總算

賦税要覽卷一

瓊江何禮之譯述

第一回 英國ノ財政ノ原ヲ論ス

我カ英國ノ封疆ヲ顧ミルニ泰西ノ孤島ニシテ  
 僅カ十二萬方里英國ノ尺度ニ過ス之ヲ世界ノ大ニ  
 比スレバ恰モ彈丸黒子ノ如シ是即チ發財ノ源  
 ニシテ淺且小ト云フ可シ然ルニ富強ノ名實ヲ  
 得テ宇内ニ雄飛スル全ク國民ノ勤勵敏捷ナル  
 ニ由ル有ルノミ

或ハ武威ヲ輝シテ海外ヲ征服シ或ハ民種ヲ移  
シテ不毛ヲ開拓スルヲ茲ニ二百有五十年今日  
ニテハ我國民ノ瀰漫セル處南北ノ米利加洲ヨ  
リ亞細亞亞弗利加及海洋群島ニ到リ其土地四  
百五十萬方里其戸口一億五千五百萬ニ及ヒ且  
他ノ土人ト雖モ亦我カ正朔ヲ奉スルニ及ヒリ  
機巧ノ發明製作ノ工夫ニ心思ヲ勞スルヲ一  
年遂ニ汽機鐵道ハ西大利ヲ發明シ以テ億兆ノ  
使用ニ供セリ實ニ近世文運ノ一大幫助ニシテ

遐邇ノ來往比隣ノ如ク至便ニ有無ヲ通シ到處  
ノ諸港我カ船舶殆ト水面ヲ蔽ヘリ是ヲ以テ每  
歲輸入輸出スル所ノ貨物其價銀五億磅ニ至ル  
ナリ磅ハ英ノ貨量ニシテ一磅ハ凡ソ我カ  
ナリ五兩ニ當ル即チ二十斤ルリゾナリ  
生計ノ道斯ノ如ク興旺ナルニ隨フテ戸口日ニ  
増シ月ニ加ハリ則チ泰西ノ諸國中ニテ人民ノ  
輻湊スル第一ト為リ現今住民殆ト三千餘萬ニ  
至ル之ヲ農耕ノ所産ノミニテ扶持セント欲ス  
レハ必ス人員ノ四分ノ三八其食以テ足ラサル

一シ  
 工藝ニ依リテ大利ヲ獲ヘ且ツ之ニ從事シテ厚  
 給ヲ得ルノ容易ナルカ故ニ國民一般ノ家収忽  
 チ増加シテ一年ノ通計大約八十億磅ニ至ル而  
 ノ其中三億二千五百磅ハ全ク工作者ノ所産ニ  
 屬ス

地主金主ノ畜積ニ屬スル所ノ資産ハ前條ニ比  
 スレハ其數稍少ナケレ<sub>レ</sub>其實産<sub>土田</sub>動財<sub>貨金</sub>ヲ合  
 スレハ六十億磅ニ至<sub>レ</sub>リ附録ノ第一  
 節ヲ見ヨ

國債

此内「テルミニ」ブル「アンヌイ」

ノ高凡ソハ

十億磅アリ其息金ノ出計毎歲二千六百六十萬

磅即チ國民歲収ノ三步ト三分ノ一ニ當ル

本國及ヒ海外ノ所領ヲ保護スル陸軍ノ資費一

千五百四十萬磅海岸ヲ警衛シ貿易ヲ保護スル

海軍ノ資費一千百二十萬磅合計二千六百萬磅

即チ國民歲収ノ三步ト三分ノ一ニ當ル

政府ヲ建テ其政ヲ修理センカ為メニ治務外務

法院驛遞學校収稅等ノ諸局ヲ設置ス其資費一

千六百萬磅即チ國民歲收ノ二歩ニ當ル  
 無菲ノ窮民ヲ賑恤シ坊街ノ邏卒ヲ配置シ道路  
 ヲ營繕シ陰抗ヲ掃除シ及ヒ氣燈ヲ點スル工夫  
 ノ諸費其他海港市頭橋等ヲ保持スル諸費通計  
 二千二百五十萬磅即チ國民歲收ノ三歩ニ當ル  
 以上ノ四件通計九千一百五十萬磅即チ國民歲  
 收ノ一割五歩半ニ當ル之ヲ歲出ノ定度ト為シ  
 此算計ヲ更ニ詳カニセンカ為メ之ヲ左ニ表記  
 ス

千八百六十八年財用ノ歲入歲出及版圖  
 ノ表

平方積	十二萬里
戶口	三千萬人
歲入	八億磅
資産	六十億磅
國債	八億磅
歲出	稅及ヒ其取扱 ノ費用ヲ包含ス
第一 國債ノ利息	二千六百六十萬磅 ノ歲入



分ノ一  
居ル

第二 陸軍ノ資費 一千五百四十萬磅

海軍ノ資費 一千二百二十萬磅合計二千六百

六十萬磅歳入ノ三分ノ一ニ居ル

第三 政府ノ資費 一千六百萬磅歳入ノ二

第四 救卹及ヒ地方ノ諸費 二千二百五十

萬磅歳入ノ二歩ト六分ノ五ニ居ル

通計九千百五十萬磅

貿易

輸入 二億七千五百萬磅

輸出 二億二千五百萬磅

通計五億磅

海外所領

平方積 四百五十萬里

戸口 一億五千五百萬

以上ノ會計其額數浩大ニシテ真ニ驚ク可ク以

テ我カ英國ノ繁榮スル基礎ヲ示スニ足レリ斯

ノ如ク繁榮ヲ極メテ富饒ヲ致ス所以ハ宇内ノ

都會ニシテ四方ノ舟車盛ニ輻湊シ而ノ萬事他  
 國ニ超乘スレハナリ此超乘スル大業ヲ保ツテ  
 泰山ノ安キニ居ラシメンニハ其費用實ニ亦々  
 浩大ナラザルヲ得サルカ故ニ國民ヲシテ租稅  
 ヲ樂輸セシメ憂戚ノ色無カラシムルヲ緊要ト  
 ス是ヲ此レ國家ノ財用ヲ理成スル者ト云フ可  
 シ  
 夫レ此ノ如ク歲出夥多ナリト雖モ冗費アル  
 ナシ然ル所以ハ人民商業ヲ專ラニシ相競テ其

績成スル所ノ價直ヲ廉ニシテ市頭ニ售ラント  
 欲シ之カ為メニ瑣細ニ至ルヲテ孟浪ナルト無  
 ク政府ハ百事ヲ成就シ用度ヲ節制スルヲ緊要  
 トシテ以テ諸官皆勉勵スレハナリ

第二回 收稅ノ本旨

收稅ノ法ハ權衡ノ如ク平均ニシテ偏頗ナキヲ  
 要トス是「アダムスニツト」經濟家及ヒ諸大家ノ要  
 訣ニシテ世上一般ノ定論タリ之ヲ實際ニ施行  
 スルニ至リテハ議論紛々トシテ同シカラサレ

此「アダムスミット」及ヒ古ノ經濟家ノ説ニ由レハ  
庶民ノ歳収ニ比較シテ之ヲ賦課スルヲ允當ト  
ス其論ニ曰ク凡ソ國ノ臣民タル者ハ政府ノ保  
護ニ依ラスシテ安全ヲ得ル者ナケレハ亦務メ  
テ政府ヲ維持センカ為メニ其資産相當ニ出金  
ス可シ其割合ニ至リテハ貧富ヲ論セス各人家  
収ノ多寡ニ應スル者トス譬ヘハ我カ英國ノ如  
キハ每人出税ノ實額所謂什一ノ割ニ當ル即チ  
之ヲ算計スルニ「アダムスミット」氏ノ法則ヲ以テ

スルキハ其出入ノ序左ノ如シ

富豪	毎歳ノ収入	五千磅
	同 出税	五百磅
技藝工商	毎歳ノ収入	五百磅
	同 出税	五十磅
力作者	毎歳ノ収入	五十磅
	同 出税	五磅

然レ此「ベンタム」<sup>三</sup>「ミール」<sup>ル</sup>及ヒ後來ノ諸家ニ於テ  
右ノ法則ハ真ノ平均齊一ト為ス可ラサル理ヲ

辨シテ曰ク貧家衣食ノ資中ヨリ輸納スル所ノ  
租税ハ之ヲ豪富ノ有餘中ヨリ出ス者ニ比スレ  
ハ難易懸隔シ肉ヲ剥クノ患ニ非ラスヤ是ニ於  
テ天下皆ナ此論ヲ奉シ以テ貧家細民ノ歳収ハ  
衣食營生ノ資ニ属スル者ナレハ須ラク課税ヲ  
輕クシ或ハ全ク免除シテ可ナリトス又「メント  
」氏ノ法ニ從ヘハ家収ノ最寡ノ極ヲ假定シテ  
五十磅ト為シ此高ニ至ル迄ハ扨テ無税ニシテ  
可ナリトス是レ理ニ於テ一點ノ弊アラスト云

フ可シ然レニ此法ハ獨リ直税ニ限レハ之ヲ實  
際ニ施スヘシト雖ニ種々ノ間税アルヲ以テ更  
ニ施スヲ得ス何者間税ハ今日需ムル所ノ物價  
中ニ含ム者ニシテ其人ヨリ之ヲ分算セサルヲ  
以テ税ノ多少ヲ定メント欲スレニ諸品其價ヲ  
異ニシテ多ク購ムル者ニハ之ヲ増シ少ク買フ  
者ニハ之ヲ減スヘキヤ其行フ可ラサルハ顯然  
タリ

此故ニ現今我カ英國ニ施ス所ノ税則ハ當ニ生

活ノ要需ニ租税ヲ徴セサルノミナラス貧家ニ至リテハ歳出ノ用度ト雖モ亦之ヲ免除ス財政中ニ此法アルヲ以テ前文ニ述ヘタル哀矜ノ趣意ヲ達シテ民ノ困苦ヲ恤レニ而シテ又酒及ヒ煙草ノ如キ人ヲ惡習ニ誘導スル物ハ貧家ト雖モ其税ヲ重クシ以テ民ノ之ニ浸淫スルヲ戒ム「アダム、スミット」ノ税法ヲ基トシ加フルニ諸家ノ論ヲ斟酌シテ以テ左ノ法則ト為スヘシ

第一 衣食ノ用度ニ重税ヲ賦ス可ラス

第二 煙酒ノ如キ無益ノ贅品ニ重税ヲ賦ス

可シ

第三 右ノ兩件ヲ除キ其餘ノ收入ニ就キテ

相當ノ税ヲ賦ス可シ

第四 租税ハ宜シク一定同經ナルヲ要ス隨

意ナルヘカラス不平均アル可ラス

第五 租税ハ之ヲ納ムル者ノ極メテ便利ナ

ル時ト法トニ從フヘシ

第六 租税ハ務メテ其高ヲ減シテ民産ヲ培

育ス可シ

右ノ法則ニ從フテ税ヲ賦シ而ノ之ヲ納ムル者ハ其身分ニ應シテ過度ノ受用ヲ為サ、レハ左ノ算計ト為ル

一年ノ収入 五千磅ノ富家

出税 五百磅一割ニ當ル

同 収入 五百磅ノ商職家

出税 四十五磅九歩ニ當ル

同 収入 五十磅ノ力作者

出税 三磅十シリング七歩ニ當ル

此法ニテハ要品ノ税ヲ減シテ贅物ノ税ヲ増スカ故ニ國民能ク其本分ヲ守リテ過度ノ費ヲ為サ、ル者ハ夫レ丈々出税ヲ免カル、ノ理ナリ  
右上中下三等ノ家収ハ國中ヲ平均シタル大數ナリ實際ニ於テハ或ハ田土ヨリ出テ或ハ金貨ヨリ出テ或ハ工藝ヨリ出ルニ從フテ差異アル可シ

第三回 収税ノ法

賦税要覽 卷一  
億兆ノ金ヲ億兆ノ民ヨリ徴ス其法タル税ヲ賦  
スルニ於テ唯々一種ニ定ム可キヤ或ハ數種ニ  
定ム可キヤ以テ能ク其効ヲ見ルト孰レヲカ善  
シトセン「アダムスミット」ノ論ヲ用ヒテ貧富ヲ問  
ハス國中一般ヲ平均シテ每人ノ家収ヨリ十分  
一ノ税ヲ納メシムルキハ取立ノ容易ナラサル  
ノミナラス弊害モ亦少カラス稍富饒ノ民ト雖  
モ其ノ苛煩ニ堪ヘサル可シ況ヤ貧窶ノ者ニ至  
リテハ實ニ一日モ之ヲ施行シ難シ必ラス逋欠

ヲ生セン且又一度逋欠スレハ豈償納ノ期有ル  
ヲ得ン此故ニ租税ハ須ラク其種類ヲ多クシテ  
民ノ貧富ニ準シ億兆ノ中ニ數目ヲ立テ、分配  
スルヲ善シトス是レ今日迄テ經驗スル所ナリ  
國民ノ租税ヲ負フハ兵卒ノ糧囊ヲ負ニ同シ瞬  
間モ之ヲ却スヲ許サス故ニ其ノ疲勞ヲ救ハン  
ト欲シテ歷來百方ヲ盡シタリ實ニ一條ノ紐革  
モ其處ヲ得サレハ全囊ノ重サ一方ニ偏集シテ  
堪ユ可ラサル者ト為ル此故ニ其重サヲ整齊シ

テ宜ク滿背ニ均分セシム可シ人智ノ闢ケルニ  
 隨フテ心ヲ勞シ思ヲ焦シ許多ノ方法ヲ設ケタ  
 レ正一利ヲ得レハ一害隨ツテ生ス故ニ之ヲ負  
 フ者肺疾ヲ患ヘサレハ跛脚ト為リ皆ナ元氣ヲ  
 保ツテ能ハスシテ遂ニ斃ルニ至ル此レ條革  
 ノ偏倚シテ全重ヲ均分セサルカ故ナリ  
 租税ハ右ノ如ク國民ノ決シテ卸ス可ラサル重  
 荷ナルカ故ニ財政ヲ執ル者ニ於テ其聰明ヲ竭  
 クサ、ル可ラス銖銖ノ税ト雖モ其法ヲ得サレ

ハ必ス其疾苦ニ堪ヘサル可シ宜シク之ヲ國民  
 一体ニ均分シテ輕重偏倚ノ患ヘナキ章程アル  
 ヲ要ス

歴來其章程ヲ立テタルノ數回ニアラス然レモ  
 皆ナ不幸ニシテ未タ至當ヲ得ス且其實効ヲ見  
 ルニ彼ノ擔者ヲ扶持セサル而已ナラス却テ全  
 國ノ民瘼ヲ醸生シ即チ徵税ノ桎梏其身ヲ束縛  
 ス之カ為メニ心思鬱悒シ進退困窮シテ手足ヲ  
 措キ飲食ヲ承ル所ナキニ至リ終ニハ工藝衰微



シテ貿易零落ヲタリ是故ニ國ノ大臣其極枯ヲ  
 解キ去ルヲ以テ任ト為シ爾米心思ヲ費シ汲々  
 トシテ其療法ヲ求ムレト一新ノ功ヲ奏スルニ  
 至ラス之ヲ完全シテ善美ヲ盡フ迄テハ尚才税  
 法ニ於テ改正ス可キ事業鮮ナカラスト知ル可  
 シ  
 然レトモ若シ良法ヲ考ヘ得テ之ヲ施スルハ彼ノ  
 兵卒ノ課程ヲ増スル無フシテ糧囊ヲ輕クス可  
 キ所謂勞スル所少ナクノ方術無キニシモアラ

ス希クハ將師ニ於テ全軍ノ元氣ヲ傷ルル無ク  
 此行陣ヲ全フスルヲ得ヘ永ク億兆ヲシテ其恩  
 澤ニ浴セシメ賜ハンテラ

租税ノ目數千八百四十一年以來甚々減少セリ  
 ト雖モ尚才數種アリ之ヲ簡易ニ記スヘシ  
 計簿ニ載スル所ノ官税ヲ八種ニ分ツ即「ゴ」スト  
 「ム」輸入税「エ」キサイ「ス」内地産「スタ」アム「プ」ス「證」印  
 「ア」スセス「ト」家「イ」シ「コ」ム「エ」ンド「プロ」ペル「チ」イ「入」收  
 及資産「ポ」スト「ヲ」フ「シ」郵信「ゴ」ロ「ラン」ラ「ン」ズ「公」田  
 税

三スセルレンシユス雜是ナリ右ノ部類中ニ唯  
 タ其取立方ノ相似タルノミニテ其ノ趣意全ク  
 相類セサル者ヲ混同スルコトアリ是等ハ舊習ノ  
 然ラシムル所ニシテ別ニ意アルニ非ス  
 コストム山税ハ維廉王第一世前ヨリ既ニ國中ニ  
 施行シタリコストムトハ故例舊習ト云フ義ニ  
 テ上古ヨリ海ロヲ出入スル貨物又ハ橋梁渡頭  
 ヲ越ル物品ヨリ租税ヲ取り今日迄テ陸續トシ  
 テ斷ヘサル故ニ此名ヲ得タリ今日ノコストム

税ハ之ヲ賦スル物品只數種ナリト雖モ其額浩  
 大ニシテ緊要ノ税ト為レリ  
 正キサイス税ハ千六百二十六年ニ始メテ内地  
 ノ産物ヨリ之ヲ抽キ取り其後停止セシカ千六  
 百四十三年ニ至リ議院ノ議定ニ依リテ再ヒエ  
 ール酒、ビール酒、サイドル酒、バルリー酒ニ限リ  
 テ之ヲ賦シ之ヨリ永久ノ正税ト為リタリ今日  
 ニテハ其酒品ノ外賣酒ノ免状料及ヒ賃車鐵道  
 射臘ノ免状料飼犬ノ税モ此類ニ属ス

「アスセス」ト税ハ原ト「フェメー」ジト稱シテ維廉王  
 第一世ノ頃ヨリ煙窓一孔ニ就キテ若干ノ貢ヲ  
 奉リタル故例ナリシカ其後廢止シ查耳斯王第  
 二世ノ時ニ至リテ再興シテ竈税ト為リ維廉王  
 第三世ニ至リテ家税窓税ノ名目ト為レリ  
 「スタアム」ト税ノ濫觴ハ昔シ和蘭國西班牙國ト  
 大ニ戰爭シテ軍費ニ窮シタル時ニ國中ニ令ヲ  
 下シテ曰ク新ニ租税ノ良方ヲ工夫シタル者ア  
 ルニ於テハ大賞ヲ與ヘント此ニ於テ諸人心思

ヲ勞シ竟ニ此税ヲ發明ス之ヲ十六百二十四年  
 ニ採用シ同七十一年ニ至リテ始メテ我カ英國  
 ニ施行ス同九十四年ニ至リ「コロバート」ト遺物ノ  
 類ヨリモ亦取立タリ爾後其數愈多ク其品益異  
 ニシテ證書手形ノ類ヨリ「インシユレン」ト危險  
 「コロバート」ト遺物「グデーシ」ト證書「シユクセス」ト  
 證書ノ其他一切ノ免許狀藥劑ノ官許等ニ於テ  
 モ取立ルト為リタリ  
 「インコム」税ハ千七百九十八年ニ其時ノ宰相ヒ

ツト氏ノ始メテ設ケタル所ナリ  
ロカール地方税即チ別税ハ七王割據ノ頃ノ郡賦  
ノ遺風ニシテ國税ノ中ニ於テ尤モ舊キモノナ  
リ  
租税ノ目ヲ區別スルハ右ノ如クニシテ各其  
ノ由来アラサルハ無シ然レモ「五キサイ」及ヒ  
「スタンプ」税ノ如キニ至リテハ一目ノ中ニ數  
種ノ品類アリ一々之ヲ分解スルハ無用ニ屬  
スル者トス

諸テ經濟家ノ論ニ據ルルハ租税ノ品類ヲ區分  
スル一甚々精密ナリ其學科ニ則チ曰ク賃金ノ  
税曰ク田地ノ税曰ク利益ノ税曰ク給料ノ税曰  
ク收入ノ税物品ノ税約定ノ税郵便ノ税詞訟ノ  
税地方ノ税是ナリ此論ハ極メテ至當ニシテ理  
上ニ於テハ一喙ヲ容ル能ハスト雖モ其區別精  
微ニ過キテ實際ニ施行シ難シ是故ニ現用ニ供  
スルニハ只々簡易明白ニシテ人々ノ速ニ會領  
スルヲ以テ第一ト為スナリ

然レハ其區別ニ於テ簡易ナル手段アリヤ曰ク  
 古法ニ之レアリ即チ國課ヲ直税間税ノ二種ニ  
 分ツ是ナリ直税トハ都テ其本人ヨリ直ニ輸納  
 スルモノニテ家税地税ノ如キヲ云フ間税トハ  
 買者ト賣者ノ間ヨリ出スルモノニテ其税ハ乃  
 チ物價中ニ包含ス輸入輸出税「エキサイス」税ノ  
 如キヲ云フ  
 然レハ直税ト間税トハ必竟租税ヲ納ムル模様  
 ニ依リテ之ヲ區別スル者ニテ其本来ノ品質ニ

就キテ之ヲ區別スル者ニアラス故ニ之ヲ以テ  
 至當不易ノ名目ト為シ難シ譬ヘハ收入税家産  
 税ノ如キハ其本人ヨリ之ヲ納ムルキハ直税ト  
 為リ借主或ハ典主ヨリ之ヲ出スキハ間税トナ  
 ルカ如シ  
 更ニ租税ヲ區別スル一法アリ甚タ簡易ニシテ  
 速ニ解シ易ク即チ其品質ニ於テ判然タル區別  
 アリ從來ノ經濟書ニ未タ之ヲ論セス  
 第一 收入及ヒ資産ノ税即チ「シ」ト受

第二 耗出ノ税即チ「アオトゴイン」用ノ度  
 右ノ兩種ハ傳來最モ久シクシテ收入ノ税ハ地  
 方ノ別税ヨリ始リ耗出ノ税ハ輸入輸出ノ物品  
 ヲリ上納セシ者ニテ時運ノ開化ニ從フテ正當  
 ノ官税ト爲レリ  
 收入ノ税ハ往古封建ノ頃ノ直税ニシテ耗出ノ  
 税ハ其頃ノ間税ナリ而シテ直税ハ當然ノ義務ニ  
 シテ苟クモ田地家屋ヲ有スル者ハ決シテ其人  
 ノ儉奢ニ從フテ増減ヲ為ス即チ贅品ヲ購ムル

○徴調ヲ免ル可ク間税ハ隨意ノモノニシテ△

ト多カラサレハ納税モ亦タ尠キカ如シ  
 官税ノ目亦多シト雖モ其原ヲ推スハ都テ此  
 二種中ニ在ラサルハ無シ然リ而シテ別ニ一種ア  
 リ時トシテハ收入ニ屬シ時トシテハ耗出ニ屬  
 ス即左ノ類是ナリ  
 第三 職業通信ノ租税及ヒ免許料  
 昔シ封建ノ頃ニハ之ヲ目シテ直税ト為シタリ  
 シカ其後經濟家ニ於テ其理ヲ推シテ之ヲ間税  
 ト定メタリ

地方ノ税モ亦々間直ノ二類相混シ時トシテハ  
 地主ノ收入ヨリ輸納シテ直税トナリ時トシテ  
 ハ借主ノ耗出ヨリ輸納シテ間税トナルナリ  
 地方ノ税ヲ斯ク直間ノ二類ニ區別シ其ノ比例  
 ヲ一定スルハ經濟家ノ心思ヲ費ス要務ニシ  
 テ甚々容易ノ者ニアラス之ヲ別款即チ地方税  
 及ヒ「ト」ヨル「ル」通税ノ條ニ出シ其處ニ於テ詳論セ  
 リ

第四回 租税ノ大區別

今我英國ニ行ハル、税目ヲ枚舉シ其類ヲ分ツ  
 テ之ヲ論セン是ハ頗ル迂遠ニ似タリト雖モ諸  
 税ニ就テ彼此ノ比例ヲ明カニ通曉シ而ノ國家  
 ノ財政ノ宜シキヲ得ルト否ルトヲ領會スルニ  
 ハ欠ク可ラサル要務ナリ

先ツ初メニ國ノ歳入中ニ就テ其幾許ハ純粹ノ  
 租税ニ屬スルヤ其幾許ハ渾合ノ租税ニ屬スル  
 ヲ定ムルハ肝要ナリ去ル九年ノ間ノ歳入ヲ平  
 均スレハ一年七千萬磅ト為ル地方ノ税ハ年々

加増シテ遂ニ二千二百五十萬磅ト為ル之ヲ合算シテ渾稅ノ總計九千二百五十萬磅ト為リ而シテ千八百六十七年四月ヨリ同八年ノ四月ニ至ル一年ノ歲入ヲ會計スルキハ官稅六千九百六十萬磅地方ノ稅二千二百五十萬磅ニシテ總計九千二百十萬磅ナリ

此金額ノ中ニ公田ノ租金或ハ其所産ノ價金アリ是レハ國ノ公財ニ屬ス故ニ純稅ニアラス港ロノ費用及ヒトナルノ稅アリ是ハ會社ノ資産

ニ屬ス故ニ純稅ニアラス郵便ノ利益アリ是ハ甚タ廉價ヲ以テ衆人ノ用ヲ達シ而シテ職業ノ生息ニ屬ス故ニ純稅ニアラス其他印度ノ繳納金、舊儲ノ物遺失ノ物、無主ノ畜類等ヨリ收納スル雜入アリ此等モ租稅ノ名アルノミニテ以上ハ皆ナ渾稅ニシテ純稅ト自ラ別ナリ千八百六十七年ノ會計ニ據レハ其總額左ノ如シ

官ノ歲入

公田

三十四萬磅



郵便ノ利益 三百二十三萬磅  
 雜入 二百五十九萬磅

地方ノ歳入

會社ノ資産 五十萬磅

港口ノ費用 二百三十四萬磅

總計九百萬磅之ヲ渾稅九千二百十萬磅ノ額  
 ヨリ引去ルキハ其剩ル所ノ八千三百十萬磅  
 即チ純稅ノ全額トナル

此會計ヲ基トシテ全國人民ノ收入ヲ八億磅ト

做スルハ右純稅ノ全額ハ即チ其ノ一割ト三分  
 ノ一余ニ當ルナリ

右ノ八千三百十萬磅ノ純稅中ニモ又全ク引キ  
 去ル者ナキニアラス譬ヘハ文武ノ官吏其他租  
 稅ヲ以テ資用ト為ス者アリ此輩ノ所納ノ租稅  
 ハ原ト取立タル租稅中ヨリ出ル所ノ租稅ニシ  
 テ一物兩用ヲ為ス故ニ之ヲ引キ去リテ真ノ純  
 稅ハ凡ソ七千六百萬磅ニシテ國民ノ收入ヨリ  
 受用スルモ七億二千萬磅中ヨリ輸納スル所ノ

モノナリ

實際ノ算ヲ為スキニハ判然ト此ノ區別ヲ定メ  
難シ是レ租税中ヨリ納ムル所ノ租税ト國民總  
體ノ收入ヨリ出ス所ノ租税トノ境畧ヲ區別シ  
難ケレハナリ  
故ニ先ツ英國ノ租税ヲ八千三百萬磅ト看做シ  
續ヒテ之ヲ賦スル所ノ財原ヲ説ク可シ

賦税要覽卷一終

